

新書で読める社会学・2017年版

【家族】

- 山田昌弘『モテる構造——男と女の社会学』（ちくま新書、2016年）
筒井淳也『仕事と家族——日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』（中公新書、2015年）
柴田悠『子育て支援と経済成長』（朝日新書、2017年）
水無田気流『シングルマザーの貧困』（光文社新書、2014年）
日本財団子どもの貧困対策チーム『子供の貧困が日本を滅ぼす』（文春新書、2016年）
平山亮・古川雅子『きょうだいリスク——無職の弟、非婚の姉の将来は誰がみる？』（朝日新書、2016年）
天野正子『〈老いがい〉の時代——日本映画に読む』（岩波新書、2014年）

【学校】

- 志水宏吉『学力を育てる』（岩波新書、2005年）
内田良『教育という病——子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』（光文社新書、2015年）
吉川徹『学歴分断社会』（ちくま新書、2009年）
竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、2003年）
本田由紀『教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ』（ちくま新書、2009年）
佐藤文隆『職業としての科学』（岩波新書、2011年）
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書、2016年）

【会社】

- 難波功士『「就活」の社会史——大学は出たけれど…』（祥伝社新書、2014年）
濱口桂一郎『働く女子の運命』（文春新書、2015年）
佐藤博樹・武石恵美子『男性の育児休業——社員のニーズ、会社のメリット』（中公新書、2004年）
本田一成『主婦パート——最大の非正規雇用』（集英社新書、2010年）
工藤啓・西田亮介『無業社会——働くことができない若者たちの未来』（朝日新書、2014年）
宮本太郎『生活保障——排除しない社会へ』（岩波新書、2009年）
井上智洋『人工知能と経済の未来——2030年雇用大崩壊』（文春新書、2016年）

【地域】

- 新雅史『商店街はなぜ滅びるのか——社会・政治・経済史から探る再生の道』（光文社新書、2012年）
橋本健二『階級都市——格差が街を侵食する』（ちくま新書、2011年）
山下祐介『限界集落の真実——過疎の村は消えるか？』（ちくま新書、2012年）
広井良典『創造的福祉社会——「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』（ちくま新書、2011年）
結城康博『孤独死のリアル』（講談社現代新書、2014年）
白波瀬達也『貧困と地域——あいりん地区から見る高齢化と孤立死』（中公新書、2017年）
阿部彩『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂』（講談社現代新書、2011年）

【世界】

- 西山隆行『移民大国アメリカ』（ちくま新書、2016年）
トッド『シャルリとは誰か？——人種差別と没落する西欧』（文春新書、2016年）
梶谷懐『日本と中国経済——相互交流と衝突の100年』（ちくま新書、2016年）
大西裕『先進国・韓国の憂鬱——少子高齢化、経済格差、グローバル化』（中公新書、2014年）
末廣昭『タイ——中進国の模索』（岩波新書、2009年）
大泉啓一郎『老いてゆくアジア——繁栄の構図が変わるとき』（中公新書、2007年）
植村和秀『ナショナリズム入門』（講談社現代新書、2014年）